＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter

[No.19　2009/4/22]

----

gCOE授業科目の開講について
gCOE新メンバーの紹介
平成21年度第1回大学院学生海外派遣事業について
研究アシスタント(RA)の募集について
次回のオープンレクチャーについて
平成20年度海外派遣大学院生の調査報告
第17回オープンレクチャーの要約
gCOEスタッフ海外出張報告

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ gCOE授業科目の開講について

昨年度に大学院博士後期課程に入学した方からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバルCOEが開講する授業科目から「テクスト布置解釈学原論」と「テクスト布置解釈学各論」を各 2単位修得することが必要です。またこれらの授業への登録はグローバルCOEプログラムが推進する二つの事業に応募する際の条件となっています。一昨年度以前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバルCOE授業科目に登録し履修していることが、グローバルCOE論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています。
開講科目の詳細についてはgCOEのWebページからご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/

■ gCOE新メンバーの紹介

文学研究科の金山弥平教授（哲学)、池内敏教授（日本史学)、大石和欣准教授（英文学）が事業推進担当者として、また水本早奈美さんが事務局スタッフとして新たにグローバルCOEに加わりました。新メンバーについてはグローバルCOE のWebページでも紹介していく予定です。

■ 平成21年度第1回大学院学生海外派遣事業について

課程博士論文の執筆を最終的な目的として、論文執筆に必要な海外での調査をサポートするのがこの大学院学生海外派遣事業で、年に2回募集しています。受付期間内に計画書を作成して応募してください。
募集人員：若干名
受付期間：2009年4月24日(金)〜5月7日(木)16時半

募集要領はグローバルCOEのWebページに掲載しています。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/

■ 研究アシスタント(RA)の募集について

gCOEでは博士後期課程の大学院生を対象に、研究アシスタント(RA)を募集しています。4月23日（木）16時30分までにgCOE事務室に必要書類を提出してください。
詳しくは下記のWebページでご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education05/

■ 次回のオープンレクチャーについて

2009年5月13日（水）18:00～　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス
講演者：金山弥平（文学研究科教授・哲学）
題目：「プラトンと文字の功罪」

■　平成20年度海外派遣大学院生の調査報告

福岡麻子さん（ドイツ文学）の調査報告を下記に掲載します。

報告者はグローバルCOEプログラム海外派遣事業に採択された「エルフリーデ･イェリネク初期作品における言語の複数性の意義」の研究に必要な作業（資料収集、研究者訪問等）のため、上記の期間ウィーン大学及びウィーン市内の各施設を訪れた。
2004年ウィーン大学に創設されたイェリネク研究センターには、研究書、研究論文、イェリネクにかかわる新聞記事、上演作品のビデオなどあらゆる資料が収集されている。旅行者はセンターにて、イェリネクにおいて大きな役割を持ちながら、論じられることのまだ少ない〈言語と身体像の関連〉というテーマにとって重要な、また日本では入手困難な資料を提供してもらうことができた。研究員のクリスティアン・シェンカーマイアー氏は快く面談に応じてくださり、イェリネク演劇における言語と身体の関係性をはじめ、イェリネク諸作品の背景となっている事項、オーストリアのメディア環境（極左的なテレビ番組など）についてお話いただいた。アクチュアルな事象に反応することがイェリネク作品の一つの特徴･意義である中、日本でそれらの出来事をアップトゥデートに追っていくのは難しく、それらについて少しでも知ることのできた貴重な機会となった。
センター長でイェリネク研究の第一人者、ピア・ヤンケ教授も、毎週のオフィスアワーに訪れることを快諾くださり、旅行者の研究テーマについて指導いただいた。またその際、作品を取り巻く環境に触れるため、イェリネクの住む地区、彼女のよく訪れていたカフェなどを教示いただき、作品に直接的･間接的に描かれるウィーン各所の雰囲気を経験できたのも大きな収穫の一つである。
イェリネクの最新演劇 “Kontrakte des Kaufmanns”はケルンで初演されるが、その演出家でイェリネク演劇をいくつも手がけてきた（そしてイェリネク本人とも信頼･友人関係にある）ニコラス・シュテーマンは、ウィーンでその〈朗読〉を催した。テクストを編集せずに全て舞台に乗せる、第一にサイズの点で異例の〈朗読〉は4時間半にも渡った。朗読は複数の俳優によって行なわれ、音楽や衣装、さまざまなアクション、コーラス的な読みによって書かれた言葉が身体化されるための多様な企みを観察することができ、〈言語の複数性〉をテーマとする本研究にとってまたとない機会となった。
イェリネクを始め、ゲーテ、ジジェクなどのテクストを織り交ぜてつくられた、クリストフ・シュリンゲンジーフの「レディメイド･オペラ」、”Mea Culpa”が3月20日に初演され、それを鑑賞できたことも収穫である。テクストだけでなく、ワーグナーを始めとする〈ドイツ〉音楽のコラージュ、ブルク劇場という伝統劇場で、さまざまな国籍･肌の色の役者（中には、シュリンゲンジーフがレストランでスカウトしたという素人の老夫婦も混じっている）がつくる世界は、ボリス･グロイスが示唆するような〈矛盾〉を暴露する作業が生み出したものであり、引用のコラージュを専売特許とするイェリネクの作業とスタンスを共有する。そのような意味で、複数的なものとしての世界・テクストが〈オペラ〉

という（これもまた注釈の多く必要な）形として現実化された作品を見ることができ、本研究にとって大きな示唆となった。
他には、国会議事堂における「1918／2008」展（第一次大戦から現在までのオーストリアの歴史展）、ユダヤ人博物館を訪れ、イェリネクの社会批判的なスタンスを条件付ける〈オーストリア〉の歴史、またその提示のされ方を知ることができた。さらに朗読会にも訪れ、現代文学のあり方の一端に触れ、司会者に話を聞くこともできた。今回の滞在で物理的・経験的な意味で資料収集ができたこと、舞台に乗せられた形のイェリネクのテクストを〈読む〉ことができたことを基に、今後も研究を進め、課程博士論文ではさまざまな〈テクスト〉が相互に条件づけあって成り立つものとしての〈テクスト〉がイェリネクにおいて持つ一つの意義を示したい。

■　第17回オープンレクチャーの要約

2009年4月15日（水）18時〜19時　国際センター15F gCOEオフィス
池内敏 教授（文学研究科・日本史学）
題目：「19世紀の竹島・松島認識について」

　江戸時代までに日本で作製された日本図における竹島（鬱陵島）・松島（竹島／独島）の記載や彩色の有無には年代的な特徴が指摘でき、概ね「甲記載無し→乙記載あり無彩色→丙記載あり彩色」と整理できる。ここで甲から乙への変化は18世紀前半に、乙から丙への変化は18世紀末に見いだせる。
　一方、隠岐国の地誌『隠州視聴合記』（1667年）の冒頭にある一文「然則日本之乾（西北）地、以此州為限矣」は、用語・用例等々を勘案すると「日本の西北境界は隠岐国である」としかならないから、17世紀半ばには松島（竹島／独島）が日本の領域外と認識されていたことが明らかである。ただし、そのことは、朝鮮領と認識されていたということと同値ではない。
　ところで、竹島（鬱陵島）が朝鮮領だということは17世紀末の徳川幕府も認めていたが、松島（竹島／独島）については不問に付したままであった。それが18世紀半ば以後になると、竹島（鬱陵島）はそもそも日本領だったのに朝鮮へ渡したのだとする論が現れる。こうした論調を、日本図における竹島（鬱陵島）・松島（竹島／独島）の記載や彩色の変化と重ね合わせてみることもできよう。こうした変化に領有「認識」の変化を読み取ることは可能だが、それは領有「権」の変化とは直結しないことに留意が必要である。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

長尾伸一（gCOE推進担当者・経済学史）

今回の出張はブリテンと大陸のニュートン主義を比較検討する前提となる、初期近代の科学テキストの収集と分析を目的とした。
ニュートン主義は真空中を動く粒子の表象と機械論によって、啓蒙の基礎となる合理化された科学的世界像を提供し、それによって近代的人間観を生み出したと考えられてきたが、その自然科学以外の知の領域での展開は、ニュートン主義による世界の数学化、内在化、合理化、経験化などを指摘した、M.ホルクハイマー、T.W.アドルノの『啓蒙の弁証法』、E.カッシーラーの『啓蒙の哲学』、P・ゲイの『自由の科学』などの射程に基づいていた。だが1970年代以後、M.C.ジェイコブやS. シェイピンらエディンバラ学派などによって科学革命の見直しが進み、それまでの近代像とは異なった科学と宗教や政治の結合が指摘されてきた。また国際18世紀学会などで進む啓蒙研究の精緻化は、非西欧世界を含め、啓蒙の全体像をより多様性に富んだ形で示しつつある。これらを踏まえ、モダニティに内在する葛藤と多様性を解明し、現代の支配的なイデオロギーの原型であるステレオ・タイプの「近代」の起源と、

それに包摂されえない未発の思想的可能性の両者を解明することが必要だが、そのためには大陸ニュートン主義と区別されるブリテン・ニュートン主義の18世紀における展開と、19世紀における変容を中心に分析し、それと大陸ニュートン主義を比較する作業が不可欠である。その予備作業として、今回の出張では、09年2月15日から26日にかけて、ドイツ連邦共和国ベルリン自由大学に滞在し、同大学図書館所蔵文献、図書館から利用可能な電子データベースおよびベルリン国立図書館を用いて、18世紀におけるニュートン主義に関する大陸とブリテンの科学テクストを収集し、その構造分析を行った。

品川大輔（gCOE研究教育員・言語学）

2009/3/22 - 29 ブリュッセル，テルヴューレン（ベルギー）
本出張の目的は，第3回国際バンツー諸語学会（The 3rd International Conference on Bantu Languages）への参加，および同学会に参加する研究者らとともにグローバルCOEプログラムのメインテーマであるテクスト布置解釈学的フレームワークの，バンツー諸語研究への応用について討議を行うことの2点であった．
3月22日夜にブリュッセル入りし，翌23日には宿泊先であるHotel les Bluetsにおいて，ヴァージニア大学（アメリカ）のEllen Contini-Morava教授と，バンツー諸語全般を特徴付ける言語形式的特徴としての名詞クラス（noun class）体系の分析の在り方について議論を行った．名詞クラスは，例えば主語名詞と述語動詞の統語論的関係を表示する文法的一致（grammatical agreement）を規定する，純然たる文法範疇（grammatical category）として，つまり屈折的（inflectional）あるいは規約的（conventional）な装置として処理されてきた．しかしながら，例えば非人称名詞が動詞の側では人称主語として表示されたり，逆に人称名詞が述語の側において非人称名詞として扱われるといった，従来の枠組みでは一貫した扱いが困難な用法が，実際には広く認められている．これら現象には，前者においては，非人称名詞の一種の「人称化（personification）」が，後者においては，人称名詞を何らかのテクスト的な要請によって非人称的な存在として扱う語用論的な動機が背景に見出され，それが文法構造に看過できない影響を与えていると見做さなくてはならない．すなわち，言語使用，あるいは種々のコンテクストからは独立したものとして捉えられていた文法現象が，それらテクスト的諸要因と重要な連関を示していると考えられ，こういった現象を適切に分析するうえで，テクスト布置構造を視野に入れたアプローチが極めて有効であるという共通理解を得た．
学会自体は，3月25日から27日までの3日間，ブリュッセル郊外のテルヴューレンにある王立中央アフリカ博物館（Royal Museum for Central Africa）において行われた．3つの基調講演を含む発表総数は73，発表者数は83名，総参加者数はおそらく100名を超え，現在のバンツー諸語研究の最先端の議論が交わされた．学会全体のテーマとしては，1) バンツー諸語およびニジェール・コンゴ語族に関する歴史言語学，2) 名詞句構造，3) 文法化という3つのトピックが事前に設定されたが，このうち，類型論的な視点を踏まえた 2) の諸問題，および3) の文法化理論は，バンツー語学のみならず現在の一般言語学研究においても大きな関心が向けられているhot issuesであり，言語理論研究という視点から見ても，極めて高い水準の議論が展開された．さらに 1) に関しては，とくに大家と呼ばれる諸研究者らが，ニジェール・コンゴ大語族にとどまらない，広くアフリカ大陸全体の言語の系統関係を再構築する（些か精確さを欠くことが許されるならば「アフリカの言語地図を書き換える」）という壮大なプロジェクトの構想を発表するなど，とかく刺激に満ち溢れた学会であった．
報告者自身の発表は，”Historical Split of -aa (*-ag-a) in Rwa (Meru, Bantu E61)［ルゥ語における -aa（バンツー祖語 *-ag-a）の歴史的分岐］” と題して，2日目午前の動詞形態論（verbal morphology）のセッションにおいて行われた．これは，バンツー祖語において未完了相（imperfective aspect）を表示していたと想定される接尾辞 *-ag が，報告者が長年現地調査を進めているタンザニア北部の民族語であるルゥ語において，意味レベル，形式レベルの双方においてどのような変遷を遂げたかという問題に関する仮説を提案するもので，構想の概略はグローバルCOEプログラムの研究員ブリーフィング

（第9回，2008年9月）で報告したものである．質疑応答では，ロンドン大学SOASのLutz Marten氏などから有意義なコメントを頂いたが，同氏とは学会期間中に何度か議論を重ね，今後より広い研究グループに向けて研究成果を発信していくうえでの手がかりが得られた．また，ライデン大学（オランダ）名誉教授のThilo Schadeberg氏からは，今夏行われるライデンでのコロキアムへの参加を勧められるなど，有意義な交流を図ることができ，報告者自身にとっても実り多き出張となった．

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年5月中旬 を予定しています。

・…..━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━…..・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.19
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・…..━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━…..・